中部経済新聞（2022年6月23日付）
掲載記事は中部経済新聞社の許諾を得て転載しています。

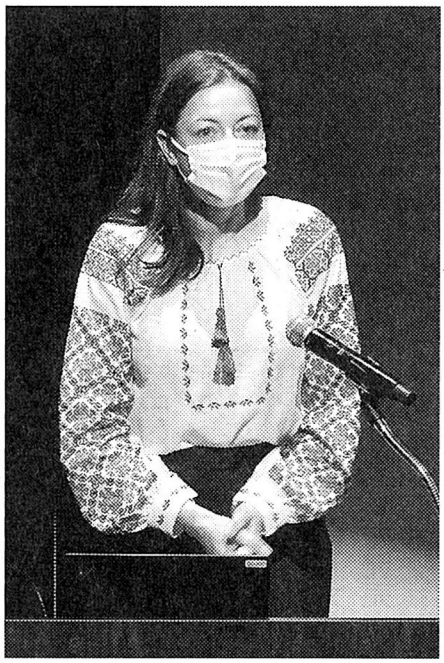
日本ウクライナ文化協会、川口理事長

ロシア侵攻の現状語る

日本福祉大学 国際福祉開発学部ゼミ

【半田】日本福祉大学は22日、東海市芸術劇場で、国際福祉開発学部ゼミ活動の一環として、NPO法人日本ウクライナ文化協会の川口リュドミラ理事長を招き講演会「ウクライナ人の思い」を開いた。

開会あいさつで、児玉善郎学長は「幸せな暮らしを支える基盤は平和と民主主義。ウクライナで起こっていることは他人事とせず、何が起きたか、何ができるかを学んでほしい」と話した。


講演する川口理事長

川口さんは、同国出身で東海市在住。13年から活動を開始し、18年に法人設立した。「ウクライナは日本から8167キロの距離。国土の60%が肥沃（ひよく）な黒土で、欧州の穀倉地帯と呼ばれる農業国。戦士精神は日本の侍と似ている」と紹介。

また、ロシア侵攻に至る経緯では「ロシア人は、ウクライナ人を〝小ロシア人〟と称し、国の誇り、言葉、文化を奪った。過酷な支配は約300年続いた。91年に旧ソ連から独立した。しかし、12年に起きたドネツク、ルガンスク問題は、多くのロシア人を移住させて、ロシア支援による独立を画策した」と現状を説明。戦争になって4カ月を経て、町は破壊され、1千万人以上の市民が避難し、1万人の兵士が死亡したと悲惨さを訴えた。